

戦略的創造研究推進事業
(社会技術研究開発)
平成29年度研究開発実施報告書

「安全な暮らしをつくる新しい公／私空間の構築」

研究開発領域

「アプリを活用した発達障害青年成人の生活支援モデルの
確立」

辻井正次
(中京大学、教授)

目次

1. 研究開発プロジェクト名	2
2. 研究開発実施の具体的内容	2
2 - 1. 研究開発目標	2
2 - 2. 中間達成目標	3
2 - 3. 実施内容・結果	3
2 - 4. 会議等の活動	11
3. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況	12
4. 研究開発実施体制	12
5. 研究開発実施者	16
6. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など	18
6 - 1. シンポジウム等	18
6 - 2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など	18
6 - 3. 論文発表	18
6 - 4. 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表）	18
6 - 5. 新聞報道・投稿、受賞等	19
6 - 6. 知財出願	19

1. 研究開発プロジェクト名

「アプリを活用した発達障害青年成人の生活支援モデルの確立」

2. 研究開発実施の具体的内容

2 - 1. 研究開発目標

研究開発期間の初期においては、(発達障害の大多数となる)知的な遅れがない、もしくは比較的軽度な知的障害を伴う発達障害のある人たちの社会的不適応に関して、実際にプログラムを取り組んでいく地域で実態を科学的に把握し、また、アプリ等の活用状況を把握し、青年成人期当事者と支援者との実際の支援経過や他者との交流のニーズを蓄積し分析していく。そして、アプリ開発においては、活用試験等を挟みながら、発達障害者の日常生活スキルや就労ソフトスキル(職務そのものに関するハードスキルではなく、職場での人間関係等のスキルをソフトスキルとしている)を促進するアプリを開発する。アプリには、発達障害者のセルフ・チェックのためのアセスメント・ツールや他者との交流ニーズを把握し、支援者との状態把握と助言を交換する機能を追加する。そして、そこで得られたチェック内容に関しての分類を医療・福祉両面から分析を行う。本アプリは、近年普及している一般向けの関係構築コンテンツとは異なるものとなっており、発達障害者の障害特性を配慮した機能を追加する。2年目では、支援の経過と日常生活や社会性のスキルの実態を蓄積し分析し、支援に取り組む事業所等での活用を進めていく。3年目以降では、支援ニーズの高い発達障害者に本アプリのチャット機能を活用してもらう。チャット上では支援者も関与しながら、彼らに交流の場を作ってもらい。そして、現実の生活でその発達障害当事者と一緒にグループ活動の場を持ち、一定の関係を築いてもらった後に、福祉的支援や就労や自立支援等につなげていく。また、実際にアプリを提供している間にも、状況に応じてアプリの機能を追加する。ヴァーチャルなつながりから現実のつながりを同期的に提案していく上では、いくつかの現実的な工夫を加えていく。

成果としては、発達障害青年成人の支援者との支援経過と地域でのつながり実態に関するデータや彼らの関心や余暇の過ごし方等を把握することができる。また、支援において有効な、スマホ等を活用した新しい支援経過を把握し分析し、次の有効な支援につなげる支援ツールを開発することができ、そのことによって、引きこもり等の社会的孤立状態にある当事者に対する新しい支援アプローチを開発することができ、現実の支援につながることで適応的に暮らすことができる当事者を増加させていくことができると期待される。支援が広く行われるよう、支援手法に関するマニュアルを作成し公開する。また、彼らに対して交流の場を用意することで予防的な活用が可能になり、「親亡き後」に悩む年若い保護者も含め、ひとり暮らしを希望する当事者を実際の独り暮らしにつなげていく効果を持つと考えられる。このことは、「親亡き後」に悩み、親子心中りリスクがある家族に対して必要な現実的な希望を示すことにもつながると考えられる。

2 - 2. 中間達成目標

中間達成目標としては、実際に運用するためのアプリを開発が中核となる。その後の、国内の各地で実証検証ができるアプリの開発と、運用を可能にするマニュアルや仕組みの開発を行う。アプリケーションとして以下の機能を含んだものとなる予定である。

発達障害青年・成人の以下のスキルチェックのプロトタイプの開発

- ・生活スキルチェックアプリの改訂版
- ・社会的スキルチェックアプリ
- ・就労ソフトスキルチェックアプリ
- ・メンタルヘルスチェックアプリ
- ・支援者の支援情報の蓄積モデルの導入

2 - 3. 実施内容・結果

(1) 実施内容

今年度の到達点①(目標)

発達障害青年成人(以下当事者)が実際に活用できるアプリケーションのプロトタイプの開発を行う。

実施項目①-1: アプリの開発

実施内容:

前年度に開発したアプリの日常生活支援(余暇支援)機能とスキルチェックアプリ機能(日常生活スキル、就労ソフトスキルやメンタルヘルス等)を、実際に発達障害成人青年に試用してもらいつつプロトタイプアプリの開発をすすめた。

まず、社会実装をすすめる上での問題点について、アプリ開発チーム内でディスカッションを行った。主な検討項目はプロトタイプアプリの提供方法、ユーザの使用方法、サーバの選定、アプリに必要な要素の検討、ワイヤーフレーム(レイアウト案)の作成である。

次に、制作したアプリを実際に当事者に使用してもらい、使用感を述べてもらい改善点を検討、それを反映した。各グループから追加・修正すべき機能や項目についての意見を出し合い、アプリのバージョンアップを進めた。2018年中に、実際に活用できるアプリの初期プロトタイプの完成を目指す。(マネジメントG、アプリG、医療連携G、NPO生活G、就労支援G)

実施項目①-2: 支援記録を活用・保管する仕組みの構築

実施内容:

各グループと支援記録の活用・保管などについてディスカッションを中心とした検討を行った。また、市販の介護支援や学習支援アプリについても可能な範囲で調査を実施した。また、スマートホンや専用デバイスを用いた生体情報の記録などの例をあげ、どのような情報がどう使うことができるのか各グループから意見を聴取した。

余暇支援アプリの進度などの関係から実装までは着手できておらず、2018年中におこなわれるスキルチェック機能の搭載時に今年度ディスカッションした内容がより具体化される予定である。(マネジメントG、アプリG、医療連携G、NPO生活G、就労支援G)

今年度の到達点②(目標)

発達障害青年成人のアプリ評価の妥当性と信頼性の検討。

実施項目②-1：アプリによる評価の妥当性の検討

実施内容：

実際の標準的なアセスメント・ツールとの関連性の中で、今回のアプリでの評価が十分に妥当なものになっているのかどうか、企画調査時点のデータに関して、再分析を行った。(マネジメントG、アプリG、NPO生活G)

実施項目②-2：余暇活動の基本情報の収集

実施内容：

余暇活動について、特にNPO生活Gからの情報を中心にディスカッションをおこなった。対象とする年齢層によってはアプリを本人が使うことは困難であるが、実施項目①-2の記録面で活用を期待する声が聞かれた。

当事者らには、これまでの余暇活動経験から起こりうる問題点や、注意すべき点などを尋ねた。これらの項目から、アプリに必要な要素を抽出していった。また、研究対象に近い世代でもあるアスペ・エルデの会学生ボランティアにお願いし、余暇活動における情報収集や、折り合いの付け方などについて聴取し、その過程でどのようなアプリを使用しているかといった情報も収集した。

また、各グループらに実際のアプリの動作を確認してもらいながら、それぞれの現場でどのように活用できるかディスカッションを行い、アプリへの要望を聴取した。(マネジメントG、アプリG、NPO生活G)

実施項目②-3：実態把握に基づくアプリの試験運用

実施内容：

実際に、発達障害成人のアプリに対するニーズ聴取を基に、アプリの仕様を検討し直し、余暇支援をサポートする「お出かけ機能」を実際に発達障害成人たちに試用してもらい、実際の余暇活動における使用における利便性や課題、可能性等を、感想を聴取しつつ取りまとめていった。できるだけ、発達障害成人の希望する機能を、うまく取り入れていくことを試みた。(マネジメントG、アプリG、医療連携G、NPO生活G、就労支援G)

今年度の到達点③(目標)

プロジェクトについての広報啓発

実施項目③：キックオフのシンポジウムの開催

以下の要領でキックオフ・シンポジウムを開催した。

名称 科学技術振興機構・社会技術研究開発センター 安全な暮らしをつくる新しい公／私空間の構築採択プロジェクト「アプリを活用した発達障害青年成人の生活支援モデルの確立」キックオフ・シンポジウム

日程 2018年3月25日(日)

場所 愛知県名古屋市

参加人数 約30名(マネジメントG、アプリG、医療連携G、NPO生活G、就労支援G)

(2) 成果

今年度の到達点①

(目標)発達障害青年成人が実際に活用できるアプリケーションのプロトタイプの開発を行う。

実施項目①-1：アプリの開発

成果： 研究着手前にアプリ開発グループ内とマネジメントグループと連絡しながら、アプリの提供形式についてディスカッションをおこなった。これは、平成28年度における企画調査プロジェクト時にはアプリ形式で提供したが、公開されていないプロトタイプアプリの更更新手順が非常に煩雑だったためそこに思いがけず時間を取られたためである。また、社会実装のためにこのアプリの維持費用をどう捻出するかについても検討した。さらに前年度時点から、特定の人だけが使用できる招待制のようなアプリを配布することが難しいことが判明していた。また、想定される施設や法人の個別ニーズに対応するためのアプリの更新頻度や、現場によってはスマートフォンでなく、タブレットを使用することが想定された。これらの検討結果から社会実装の直前までは、比較的更新が容易で、レイアウトにおいても柔軟性が高いWEBアプリとして製作することとした。

研究開始後は、主に余暇支援機能の開発に注力した。開発にあたっては、当事者や、当事者と同年代の大学生などから意見をもらい、その内容を反映した。しかしながら、文書を読んで回答するだけのスキルチェック（H28年度企画調査プロジェクト）とは異なり、自由に文章を入力することが多いため、当事者求めるITスキルがこれまでより高いことから、文字入力の簡便化など検討すること多く開発に時間をとられた。

その結果、現状のプロトタイプアプリはまだ改善の余地があるものの、当事者がこのアプリを利用して短時間の外出をして戻ってくるのが可能な段階までには達した。

実施項目①-2：支援記録を活用・保管する仕組みの構築

成果： ディスカッションなどを通じて具体例をあげながら実装の検討をおこなった。

特に支援の対象となる年齢層などによっては報告の方法が異なることが判明した。例えばNPO生活グループからは、その日の活動の様子を保護者に連絡することで、スムーズなコミュニケーションが図れるといった意見が出された。また、その様子は紙に印刷をして帰りがけに渡すなどといった方法がとられていることが報告された。特に支援対象の年齢が低い場合は、当事者と支援者だけの関係だけでなく、保護者や学校の先生など当事者を取り巻く支援者が複数いるため情報の共有がもともと簡便な紙になると考えられる。

医療連携グループからは、スキルチェックの頻度や評価尺度について先行研究を参考にしながら具体化することが話された。また、現場によっては緊急性を要する場面があるため、どの程度アプリに依存すべきかといったことが話し合われた。特に支援対象の興味度によってはスマートフォンを本人が所持する可能性が少なく、位置情報や生体情報などの収集は難しいことが判明した。こうした場合は、施設管理型のタブレットで支援者の元で各自が入力する方法を想定することとした。

こうした話し合いを下敷きに、平成30年度においてはアプリを実際に使用しつつさらに具体化を進める。

今年度の到達点②（目標） 発達障害青年成人のアプリ評価の妥当性と信頼性の検討

実施項目②-1：アプリによる評価の妥当性の検討

成果：今回、アプリによる評価に関しては、余暇スキル機能を優先させたために、十分な取り組みを行うことができなかった。しかし、日本版Vineland-II 適応行動尺度（以下、Vineland-II）と知的機能やメンタルヘルス等との関連等を別プロジェクトである生活困窮者の実態把握において、確認することもでき、現状の項目に関してさらにVineland-IIとの関連との間で妥当性を検討していくことをマネジメントG内で確認を行った。次年度以降のチェック機能の改善につなげていく。

実施項目②-2：余暇活動の基本情報の収集

成果：余暇活動の基本情報の収集では、当事者自らがイベントを作成し、そこに他の当事者が参加し、当事者らだけで出かけることを想定した。そこでアプリの制作前に、アプリ上ではどのようにイベント作成し、登録や参加をするのか、過去の経験からどのような点に注意するかなど、当事者を中心に情報収集をおこなった。（図1 2017年12月10日実施）

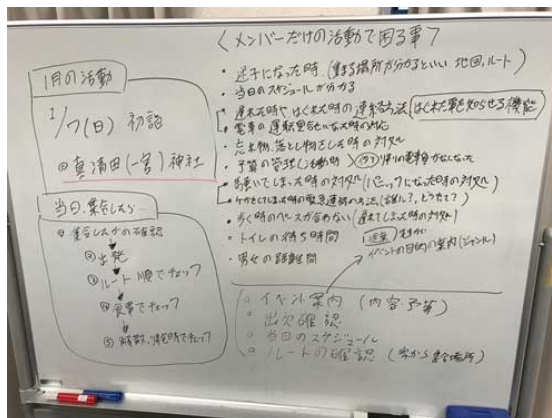


図1 基本情報の収集

収集した情報から、イベント作成、参加の流れまでを一連のモデルとしこれをアプリに実装するべく必要な要素を取り出して項目化していった。また当事者の経験から得られた要素も実装や検討をすすめた。

例えば交通機関が遅延した際や、忘れ物をした時、パニックになった時など、突発事象についての対応をする方法を実装して欲しいとの希望が出された。また、歩くペースが合わない、当日のスケジュールが分かった方が安心できるなど、行動時の不安要素を軽減できないかといった意見も出された。

また、所有している手帳（療育手帳など）の活用情報を示して欲しいとの要望もあった。これについては、全てを網羅するのは難しいが、オープンデータなどを活用していくことが検討される。

また、アスペ・エルデの会の学生ボランティアらにお願いして、イベントの企画や互いの主張が異なった場合の折り合いの付け方、既存アプリの活用方法について発表をしてもらった。（2018年1月28日実施）

例えばイベントについては、同じコミュニティに属する友人らと雑談の中からイベントを企画することが多く、すでにある程度の関係ができている場合であればイベントに参加しやすい反面、初対面では気軽に参加できにくいとの報告があった。このことから、ある程度の友人関係ができるまでは継続した支援が必要と考えられる。

また、大学生がどのようにアプリを活用しているかについては、例えば行き先の決め方などはソーシャルネットワークアプリに投稿された画像（いわゆるインスタ映え）などを参考にしており、距離や料金だけでなく視覚情報も積極的に活用することが必要と考えられた。さらに、口コミサイトの情報もよく参考にしていることが分かった。これらの機能を本研究で開発するアプリに搭載することはあまり現実的ではないが、当事者や支援者がこうしたツールを使いよりわかりやすい情報を共有することが必要だと感じた。

また、折り合いの付け方では特に食事面で対応方法について発表があり、自分の希望するものが食べられないといった場合にどのような折り合いをつけているのか各グループからその例が発表された。この中で多かったのは、多くのジャンルの食事がとれるファミリーレストランやフードコートで食事を取るといった方法や、互いが2番目に食べたいものを聞くなどして希望が合致するか確認するといった方法や、強い信頼関係があれば今回は相手の主張を受け入れ、次回は自分の主張を受け入れてもらうといった方法などが紹介された。

こうした対応方法については、支援者が介入する際の参考にすることが考えられるが、アプリ内でも何らかの対応を進めることができると考えている。

実施項目②-3：実態把握に基づくアプリの試験運用

成果： 2017年度ではプロトタイプ版アプリの試験運用をおこなった。

2018年1月28日には当事者らにアプリのワイヤーフレーム（デザイン案）を元に使用方法などを説明し、使い方をイメージしてもらった。

2018年2月18日には実際に作られたプロトタイプアプリを元に、近所へ出かけ帰ってくるまでの一連の流れを試験運用した。（図 2）この際、IDとパスワードの入力などで手間取ったが、最低限の動作は確認できた。また、想定以上に自己所有のスマートホンがあり、これ以降はスマートホンのWEBブラウザで動作させることをメインとした。



図 2 2月18日ミーティングの様子

2018年3月10日にはさらに改良したアプリを元に、少し離れた場所まで行き昼食を取ってくることを目標として試験運用をおこなった。気温が低いせいもあってか、行き帰りの途中でアプリを使うことは無かったが、当事者らが目的地に着いたことなどがアプリ内のチャットツールで知らされ、支援者が同行しなくともイベントの進行が把握できた。(図 3) また、アプリの改善点についてチャットツールでディスカッションしてもらったが、チャット上の方が活発に発言できる当事者もあり、仕事で制御系の開発を担っている当事者からは細かい指摘をもらった。



図 3 チャットの画面

2018年3月25日には、さらに改良したアプリを用いてキックオフ・シンポジウム会場からやや長時間活動をして帰ってくる試験運用を実施した。シンポジウムの準備の合間にチャットを覗くと、各グループが出かけて余暇をすごしてくる様子がよく分かった。また支援者側への報告だけでなく、到着地で個別行動をとる際などにチャットで連絡をとりながら集合時間を定めるなど、各自が折り合いをつけて楽しんでいる様子がよくわかった。



図 4 作成したビーコン

また、基本情報収集の過程で当事者らより団体行動中にはぐれる、ペースが合わず置いて行かれるといった不安の声がもたらされた。そこで現在のWEBアプリでは実装できないものの、将来的には実装も視野に入れビーコン（図 4）を制作し、何人かの当事者に持って歩いてもらった。このビーコンは自分のIDを発しつつ、周囲のビーコンIDを常に記録し続け、一定時間受信が途絶えたビーコンが現れたら警告を発するというものである。発する信号には位置情報や個人情報を持たず3桁の番号を発するのみである。また昨年度の企画調査から、アプリなどのデザインなどには障害を隠している当事者にとっては、障害を連想させない意匠性を持たせてほしいことが要望として出されており、できうる限りアクセサリー風に見えるよう心がけた。

幸いにもこのビーコンが活躍する場面は無かったが、今後は初対面同士のメンバーで外出することも想定されており、位置情報や個人情報などを交換するに躊躇する場合での使用を想定している。

今年度の到達点③(目標) プロジェクトについての広報啓発

実施項目③：キックオフのシンポジウムの開催

成果； 愛知県名古屋市において、2018年3月25日（日）に、＜科学技術振興機構・社会技術研究開発センター 安全な暮らしをつくる新しい公／私空間の構築採択プロジェクト「アプリを活用した発達障害青年成人の生活支援モデルの確立」キックオフ・シンポジウム＞という名称で、キックオフ・シンポジウムを開催した。約30名

の支援者や当事者家族、当事者たちが参加し、プロジェクトの概要を話したうえで、成人期の支援においてどのような内容が必要なのか、意見交換を行った。その上で、実際のアプリを活用した活動の報告を行い、意見交換を行った。

アプリの開発が遅れており、チェック機能に関して、十分な意見交換ができなかった等の課題があり、次年度、開発を促進していく必要があることも確認した。アプリを活用することでのインタラクティブな性質について、発見することができ、今後、こうした点の可能性を拡げることとしたい。

(3) 当該年度の成果の総括・次年度に向けた課題

今年度の取り組みによって、アプリの中で特に、余暇支援機能の試用段階のプロトタイプを開発し、実際に当事者による試用が可能になった。活動をアプリの中で記録し、支援に活用していくことが可能であることも示すことができた。当事者や当事者家族がアプリを利用し、好意的な感想を得ることができた。

今年度は、研究員の雇用等、研究体制を構築することがスムーズにいかず、研究の進捗が遅れている状況である。中京大学側での研究員雇用の仕組みの不備のために、予定していた研究員雇用ができず、アプリの開発が遅れている。アプリの開発においては、余暇支援機能に関しては、遅れながらも開発は進んでおり、当事者の主体性を重視しながら、インタラクティブに交流をしながら、活動を決めたり、修正したり、体験を共有したりする可能性があることが明らかになった。さらに、アプリを試用した活動の中でわかってきたのは、実際の活動の場になくても、アプリを通して活動を共有する利用の仕方のできるため、引きこもり状態であったり、精神的・身体的に体調が悪かったりして、活動の場にいらなくても活動に参加できる可能性を示すことができた。また、同様に、支援者も同行しなくても支援を行うことができる可能性を確認することができた。

チェック機能や、余暇支援機能とチェック機能の相互関係の仕方に関しては、開発が遅れている。平成28年度の企画調査段階のプロトタイプを基に、現状のアプリの方式に合わせて開発をすすめていく予定である。項目に関しての基本的なプランは、適応行動、メンタルヘルス、就労ソフトスキルともに、進められており、2018年度前半に遅れを取り戻す予定で考えている。

全体として、専任の研究員の雇用の遅れが最も研究の進捗に影響を与えており、2018年度に無事に研究員雇用が可能になったため、本格的な開発に進めることができると考えている。

(4) スケジュール

実施項目	平成29年度 (H29. 10～ H30. 3)	平成30年度 (H30. 4～H31. 3)		平成31年度 (H31. 4～H32. 3)	平成32年度 (H32. 4～ H32. 10)
		マイルストーン			
発達障害者実態調査	←→				←→
アプリ開発	←→				
アプリの試験	←→				
利用実態の分析	←→				
アプリの提供					←→
現実的な支援の提供					←→
現実的支援の関連性分析					←→
支援マニュアルの作成					←→
支援の有効性の評価					←→

2 - 4. 会議等の活動

年月日	名称	場所	概要
2017年12月10日	アスペ・エルデの会ミーティング	名古屋市大須	余暇支援に必要なイベント作成の流れなどを当事者らと確認した
2018年1月28日	アスペ・エルデの会ミーティング	愛知県安城市	アプリのデザイン案を説明、学生ボランティアによるイベント作成の流れ発表
2018年2月18日	アスペ・エルデの会ミーティング	名古屋市大須	第1回プロトタイプアプリ試験
2018年3月10日	アスペ・エルデの会ミーティング	愛知県稲沢市	第2回プロトタイプアプリ試験
2018年3月25日	キックオフ・シンポジウム	名古屋市	本プロジェクトのキックオフ・シンポジウムを実施、またアプリの検証も行い、当事者らも感想を述べた。

3. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況

研究開発成果については、成人期の発達障害支援のシンポジウムに招待されて報告するなど、社会的な関心は高いものと考えている。3月25日に行ったキックオフ・シンポジウムには、発達障害者支援の関係者以外にも生活困窮者の支援者も参加し、軽度の知的障害者が多く含まれている生活困窮者の自立支援への展開も含めた期待が寄せられた。

今年度は初年度で十分な成果を発信できる状況ではなかったため、今後の発信のために、ホームページを開設し、発信を行っていく予定である。

4. 研究開発実施体制

(1) マネジメント・福祉グループ

①辻井正次（中京大学現代社会学部）

②実施項目①-1：アプリの開発と初期プロトタイプの完成と活用

グループの役割の説明：マネジメントグループはアプリ開発において、アプリの開発状況と実際の当事者の利用状況とを照合し、当事者からの要望や支援者からの要望を調整し、アプリ開発が順調に進むように調整を進めていく。

実施項目①-2：支援記録を活用・保管する取り組みを行う

グループの役割の説明：アプリを活用して蓄積していく支援記録を、効果的な支援の開発につながるような形式に保存し、実際に支援者が支援記録になるようにアウトプット可能な形にしていく取り組みを行っていく。各グループで上がってきた課題をアプリグループと調整しつつ、形にしていく。

実施項目②-1：アプリによる評価の妥当性の検討をする

グループの役割の説明：メンタルヘルスや適応行動、職場でのソフトスキル等の、スキルの評価を、既存の標準化された心理検査との妥当性を検討していくことで、実際に活用できるアプリの中の評価項目を開発する。

実施項目②-2：余暇活動支援機能を実際に試してみる

グループの役割の説明：当事者の支援活動にアプリを持ち込み、アプリを活用した支援の有効性や課題を抽出していく。実際の活動とアプリ開発との調整をマネジメントしていく。

実施項目③：アプリを用いた支援についてのアウトリーチのための広報活動

グループの役割の説明：アプリの広報を含め、実際にアプリを試用してもらう事業所や当事者団体での実施の際に各地でのアプリを活用した発達障害成人当事者支援についての広報イベントを実施していく（全国8か所；横浜、滋賀、熊本、仙台、旭川、東京、金沢）。さらに、年度末に平成30年度の活動の報告としてシンポジウムを開催し、アプリの広報を含め、アプリを活用した支援についてのシンポジウムを行い、実

際のアプリを用いた支援についての方向を行い、支援者たちがアプリを活用するメリットの理解啓発をするとともに、支援者側・事業所側の使用におけるニーズを把握する機会とする。会のマネジメントを行う。

(2) アプリ開発グループ

①曾我部哲也（中京大学工学部）

②実施項目①-1：アプリの開発と初期プロトタイプの完成と活用

グループの役割の説明：本グループは、発達障害青年成人が活用するアプリの開発を担っていく。他のグループから開発に必要な知見を集め、アプリの開発と試験運用を行っていく。

実施項目①-2：支援記録を活用・保管する取り組みを行う

グループの役割の説明：アプリでのデータの蓄積や保管様式、アウトプットを

実施項目②-1：アプリによる評価の妥当性の検討をする

グループの役割の説明：他のグループからの情報を受け、項目を尺度に取り込み、実際の評価可能な状況にして、データを蓄積していく。

実施項目②-2：余暇活動支援機能を実際に試してみる

グループの役割の説明：アプリを実際に当事者の活動に試用しつつ、出てきた課題を基に、アプリについての機能のアップデートや改善に取り組む。

実施項目③：アプリを用いた支援についてのアウトリーチのための広報活動

グループの役割の説明：アプリの広報を含め、実際にアプリを試用してもらう事業所や当事者団体での実施の際に各地でのアプリを活用した発達障害成人当事者支援についての広報イベントを実施していく（全国8か所；横浜、滋賀、熊本、仙台、旭川、東京、金沢）。アプリについての詳しい解説をHP等で周知していく。また、年度末に、平成30年度の活動の報告としてシンポジウムを開催し、アプリの機能に関して説明を行い、アプリを活用した発達障害者支援についての提案を行う。

(3) 就労支援グループ

①井上雅彦（鳥取大学医学部）

②実施項目①-1：アプリの開発と初期プロトタイプの完成と活用

グループの役割の説明：適応の重要な側面である就労において、就労のための社内ルールや社内での人間関係等の視点から取りまとめられた「ソフトスキル」のチェック機能をアプリに付加する等、アプリ開発に寄与する。ジョブマッチング等への展開も考えて、項目と仕組みに関しての提案を行う。

実施項目①-2：支援記録を活用・保管する取り組みを行う

グループの役割の説明：アプリでの支援記録の管理する一方、就労の現場に対して、どういう項目をどのように現場に返していくのかも検討していく。企業でも活用可能なアウトプット様式の開発を目指す。

実施項目③：アプリを用いた支援についてのアウトリーチのための広報活動

グループの役割の説明：アプリの広報を含め、実際にアプリを試用してもらう事業所や当事者団体での実施の際に各地でのアプリを活用した発達障害成人当事者支援についての広報イベントを実施していく（全国8か所；横浜、滋賀、熊本、仙台、旭川、東京、金沢）。また、年度末に、平成30年度の活動の報告としてシンポジウムを開催し、就労支援や企業での支援と生活支援の関連性など、知見を報告し、アプリを活用した支援の有効性について検討する。

（4）医療機関との連携構築グループ

①森則夫（福田西病院）

②実施項目①-1：アプリの開発と初期プロトタイプの完成と活用

グループの役割の説明：本グループは、発達障害成人が合併しやすい、不安症状や抑うつ状態の合併への対応をしていくことで、適応状況が悪化することを医療的な視点で対応していくために、必要情報をアプリに盛り込む。

実施項目①-2：支援記録を活用・保管する取り組みを行う

グループの役割の説明：薬物療法や服薬管理支援など、医療的な支援を、発達障害者向けのデイケアなどで、アプリを用いた取り組みを行う。そこでの成果から記録や保管、アウトプットのやり方に関して、提案を行う。

実施項目③：アプリを用いた支援についてのアウトリーチのための広報活動

グループの役割の説明：アプリの広報を含め、実際にアプリを試用してもらう事業所や当事者団体での実施の際に各地でのアプリを活用した発達障害成人当事者支援についての広報イベントを実施していく（全国8か所；横浜、滋賀、熊本、仙台、旭川、東京、金沢）。また、グループの役割の説明：平成30年度の活動の報告としてシンポジウムを開催し、メンタルヘルスや医療機関での支援と生活支援の関連性など、知見を報告し、アプリを活用した支援の有効性について検討する。

（5）NPOと生活支援グループ

①宮地菜穂子（NPO法人アスペ・エルデの会）

②実施項目①-1：アプリの開発と初期プロトタイプの完成と活用

グループの役割の説明：実際に現実の支援グループを運営し、アプリの活用状況について把握していくとともに、当事者からも必要な機能ややりたいことを聴取し、アプリ開発につなげていく。

実施項目①-2：支援記録を活用・保管する取り組みを行う

グループの役割の説明：当事者自身が自分の記録を把握し、適応状況を改善していくために、記録の保管の仕方や、必要な情報の提示、個人情報の保護など、活動の中での意見集約を行い、アプリの機能に付加していくための提案を行う。

実施項目②-1：アプリによる評価の妥当性の検討をする

グループの役割の説明：メンタルヘルスや適応行動、職場でのソフトスキル等の、スキルの評価ができるよう、継続的なアプリの使用を持続してもらうよう、全国の関連団体と連絡を取りつつ働きかけ、また、各地の支援者からの評価を回収していく。

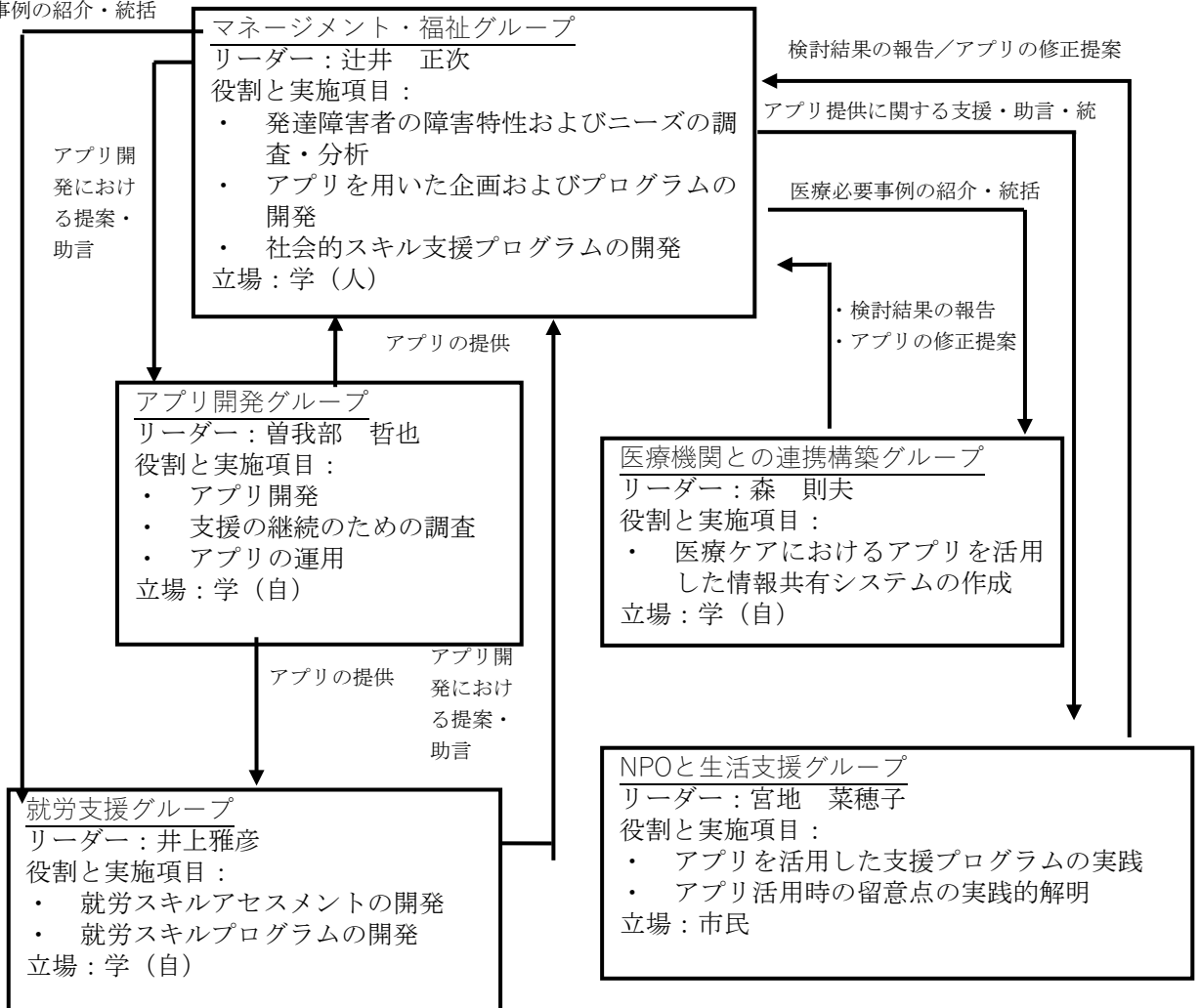
実施項目②-2：余暇活動支援機能を実際を使ってみる

グループの役割の説明：発達障害当事者の余暇支援情報の収集や、関係団体の連絡調整等を行う。適応行動のなかでも、成人にとって重要度が高い、余暇活動や、余暇活動を通じた他者とのつながりづくりのバリエーションを把握し、アプリ開発と支援手法開発につなげる。アプリを用いた支援を試行し、その有効性を検証する。

実施項目③：アプリを用いた支援についてのアウトリーチのための広報活動

グループの役割の説明：アプリの広報を含め、実際にアプリを試用してもらう事業所や当事者団体での実施の際に各地でのアプリを活用した発達障害成人当事者支援についての広報イベントを実施していく（全国8か所；横浜、滋賀、熊本、仙台、旭川、東京、金沢）。また、年度末に、平成30年度の活動の報告としてシンポジウムを開催し、余暇活動の実態やそこでの課題等を明確にし、アプリを活用した余暇活動の可能性に関して、実際の試行を踏まえて、知見を報告し、アプリを活用した支援の可能性について検討する。

就労事例の紹介・統括



5. 研究開発実施者

マネジメント・福祉グループ

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
辻井正次	ツジイマサツグ	中京大学	現代社会学部	教授
明翫光宜	ミョウガンミツノ リ	中京大学	心理学部	准教授
伊藤大幸	イトウヒロユキ	浜松医科大学	子どものこころ の発達センター	特任助教
黒田美保	クロダミホ	名古屋学芸大学	ヒューマンケア 学部	教授
久野綾香	クノアヤカ	大阪大学・金沢大 学・浜松医科大学・ 千葉大学・福井大学 連合大学院	連合小児発達学 研究科	博士課程3年
中島卓裕	ナカジマタクロ ウ	名古屋大学大学 院	発達科学研究科	博士課程3年

アプリ開発グループ

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
曾我部哲也	ソガベテツヤ	中京大学	工学部	准教授
和田三千穂	ワダミチホ	(株)ベイビー		代表取締役
西岡克真	ニシオカカヅマ	中京大学	工学部	特任研究員

NPOと生活支援グループ

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
宮地菜穂子	ミヤジナオコ	NPO法人アスペ・エル デの会	事務局	事務局長
浜田恵	ハマダメグミ	名古屋学芸大学	ヒューマンケア 学部	講師
田中尚樹	タナカナオキ	日本福祉大学	社会福祉学部	助教

就労支援グループ

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
井上雅彦	イノウエマサヒ コ	鳥取大学	医学部	教授
高柳伸哉	タカヤナギノブ ヤ	愛知東邦大学	人間健康学部	助教
榎本大貴	エノモトタイキ	Litalico研究所		研究員

医療機関との連携構築グループ

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
森則夫	モリノリオ	福田西病院		院長
片山泰一	カタヤマタイチ	大阪大学・金沢大 学・浜松医科大学・ 千葉大学・福井大学 連合大学院	連合小児発達学 研究科	教授
中村和彦	ナカムラカズヒ コ	弘前大学	医学部	教授
杉山登志郎	スギヤマトシロ ウ	福井大学	医学部	客員教授
鈴木勝昭	スズキカツアキ	小笠病院		院長
石川道子	イシカワミチコ	武庫川女子大学	文学部	特任教授
野村昂樹	ノムラタカキ	福田西病院		臨床心理士

6. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など

6-1. シンポジウム等

年月日	名称	場所	参加人数	概要
2018年 3月25日	科学技術振興機構・社会 技術研究開発センター 安全な暮らしをつくる新 しい公／私空間の構築採 択プロジェクト「アプリ を活用した発達障害青年 成人の生活支援モデルの 確立」キックオフ・シン ポジウム	愛知県名古 屋市	約30名	本プロジェクトのキックオ フ・シンポジウムを実施、ま たアプリの検証も行い、当事 者らも感想を述べた。

6-2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など

(1) 書籍、フリーペーパー、DVD

・特になし

(2) ウェブメディアの開設・運営、

・準備中（2018年5月に開設予定）

(3) 学会（6-4.参照）以外のシンポジウム等への招聘講演実施等

・武庫川女子大学平成29年度臨床教育シンポジウム、発達障害者の地域生活支援、2017年11月18日、武庫川女子大学中央キャンパス（講演「発達障害者の一人暮らしへのサポート」浮貝明典が、シンポジウム「アプリを活用した一人暮らしへのサポート」に石川道子、浮貝明典、曾我部哲也が登壇）

6-3. 論文発表

(1) 査読付き（ 0件）

●国内誌（ 0件）

・特になし

●国際誌（ 0件）

・特になし

(2) 査読なし（ 0件）

・特になし

6-4. 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表）

(1) 招待講演（国内会議 0件、国際会議 0件）

・特になし

(2) 口頭発表（国内会議 0件、国際会議 0件）

・特になし

(3) ポスター発表 (国内会議____0件、国際会議____件)

・特になし

6-5. 新聞報道・投稿、受賞等

(1) 新聞報道・投稿 (____0件)

・特になし

(2) 受賞 (____0件)

・特になし

(3) その他 (____0件)

・特になし

6-6. 知財出願

(1) 国内出願 (____0件)

・特になし